The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中村本『夜寝覚物語』の＜夢＞の論理
Author(s)	藤井, 由紀子
Citation	詞林. 2003, 33, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67496
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中村本『夜寝覚物語』の〈夢〉の論理

藤井　由紀子

はじめに

中村本『夜寝覚物語』を、原作『夜の寝覚』に比し、「夢により構造的に変換を遂げた作品」[1]と評することは、もはや、通説となっていると言ってよいであろう。たしかに、誰の目から見ても、冒頭の「空晴れ月明らかなる折、あざやかなる夢を見るを、実夢と申して、これは疾く遅き事こそあれ、必ずむなしからずとぞ承りをきたる」（巻一　三一九頁）という言は、末尾の「夢はむなしからぬ事と、ありがたくぞ侍りしとぞ」（巻五　五五七頁）という言と照応するものであり、〈夢〉がこの作品を貫くひとつの核として存在していることは疑いないように思われる。

しかしながら、はたして、ほんとうに、そこに横たわっているのは、冒頭で投げ掛けられた予言が末尾でめでたく成就するという、短絡的な一貫性であろうか。そのような枠組みを以て中村本を理解することが、この作品を正しく把捉することへと繋がるのだろうか。明瞭な構造化が、かえって、この物語の持つ固有の論理を一般化してしまうのではないかという危惧を抱く。

本稿では、中村本『夜寝覚物語』の〈夢〉を再検討し、物語内に描かれる様々な〈夢〉を繋げる論理を見出すことによって、この物語を新たな角度から照射してみたい。

一　冒頭部の再検討

まず、中村本の特徴を如実に表すと思われる冒頭部を見ていくこととしたい。

周知の通り、中村本の冒頭には、風流人たちが古典勘考をするという、いわば物語の〈場〉が設けられている。その〈場〉における話題が〈夢〉に及び、その実例として『夜寝覚物語』が語り出されるとなれば、この冒頭部には、物語の主題そのものに関わる重大な役割が担われていると考えるべきであり、したがって、その本文の精緻な読解は、物語を理解する上での大前提となるべきものだと考えられる。既に、永井和

子氏によって詳細な本文検討がなされているが、[2]それでも依然として、いくつかの難読箇所は残っているようである。その中のひとつが次の箇所である。

中におとなしき人、よろづ知り顔にて、「はかなき夢とは、いかにものし給ふか。『夢、こしぢに通ず』と申す事、本文に見えたり。……」　（巻一　三一九頁）

〈夢〉を「むなしき」ものとした「ある人」に対し、「おとなしき人」が反論するくだりである。他でもない、この「おとなしき人」こそが、『夜寝覚物語』そのものを語り出すのであって、その発言の解釈は殊の外重要であると考えられるのだが、その中にある「夢、こしぢに通ず」という箇所については、「中村本底本上欄「夢ここちにつうす歟」と朱筆貼紙があり、本文「ゆめこしちに」の「し」を「こ」と朱でミセケチする」[3]と、早い段階から解釈に揺れが生じており、現在、「こしぢ」の解釈の候補として、「越路」・「心地」・「恋路」の三つがあげられているが、定説を見ない。

たとえば、ここに、次にあげる文章を重ね合わせることはできないだろうか。

また、「何の筋と定めて、いみじと言ふべきにもあらず。あだにはかなきことに言ひ慣らはしてあれど、夢こそ、あはれにいみじくおぼゆれ。遥かに跡絶えにし仲なれど、夢には関守も強からで、もと来し道もたち帰ること多かり。別れにし昔の人も、ありしながらの面影を定かに見ることは、ただこの道ばかりこそはべれ。上東門院の『今はなき寝の夢ならで』と詠ませたまへるも、いとあはれにはべれ」など言ふ人もあり。　（一八四頁）

『無名草子』の一節である。ここで語られているのは、「夢こそ、あはれにいみじくおぼゆれ」という、中村本における「おとなしき人」の発言とその主題をまさに同じくする話題である。そして、この中に、「来し道」という表現が置かれていることを見逃してはならないだろう。〈夢〉とは、「跡絶えにし仲」が「来し道」を「たち帰る」ための回路としてあったのであり、ここに言う「来し道」とは、すなわち〈過去〉を指し示す語ということになる。「来し道」と「来し路」とは置換可能な語であろう。[4]中村本の「夢、こしぢに通ず」という本文も、『無名草子』に展開される論と同趣旨のことを述べていると考えなければならないものではないだろうか。[5]

では、仮に、「こしぢ」を「来し路」と解すことが妥当だとするならば、「おとなしき人」の発言は、全体としてどのように解釈すべきものとなるのであろうか。今、その全文をあげておく。

はかなき夢とはいかにものし給ふか。「夢、来し路に通ず」と申す事、本文に見えたり。されば、雨の夜の寝覚めがちにて、閨のうち静かならぬには、そゞろなる夢も見る。これを寤寐[6]と申すなり。空晴れ月明らかなる折、あざやかなる夢を見るを、実夢と申して、これは疾く遅

き事こそあれ、必ずむなしからずとぞ承りをきたる。古き人の語りしは――。　（巻一　三一九頁）

この言が、「雨の夜の寝覚めがちにて、閨のうち静かならぬ」ときに見る「寤寐」と、「空晴れ月明らかなる折」に見る「実夢」とを比較したものであることは明らかである。今、ここで確認しておきたいのは、前半の「寤寐」の説明が、「されば」と、「夢、来し路に通ず」という「本文」の内容を受けたものとしてあるということである。「こしぢ」を「来し路」と解するならば、それを受ける「寤寐」とは、単に「そゞろなる夢」を言うのではなく、「来し路」＝〈過去〉へと繋がる〈夢〉を指したものであるに他ならないということになろう。対するところの「実夢」は、「疾く遅き事こそあれ、必ずむなしからず」という性格を帯びた〈夢〉であった。それを、〈未来〉に開かれた〈夢〉と位置付けるならば、「寤寐」と「実夢」の対比の構図はより明確なものとなるであろう。すなわち、その構図とは、〈夢〉を見た状況やその内容の鮮明さに関わるだけのものではなく、その〈夢〉のベクトルの向かう先、時間の概念までをも含んだ対比であったのである。「寤寐」と「実夢」とは、〈過去〉に向かう〈夢〉と〈未来〉に向かう〈夢〉として捉え直さなければならないだろう。

このような理解は、「実夢」の例証として挙げられることになる『夜寝覚物語』の主題を、より鮮明に照らし出すことになる。それは、〈未来〉に対する予言の〈夢〉の実例としてあるのであって、この物語の主題が、その予言の成就する過程を描くものとしてあること、疑いないようである。

では、冒頭部に言う「実夢」、これが具体的に指しているのは、物語内のどの〈夢〉なのであろうか。そして、その〈夢〉は、そのまま末尾にまで繋がりうるものなのであろうか。以下、物語の展開に即しつつ、検討していくこととしたい。

二　天人の予言とその実現（1）

まず、冒頭部において「おとなしき人」によって語られる「実夢」の内容をもう一度確認しておくこととしたい。

空晴れ月明らかなる折、あざやかなる夢を見るを、実夢と申して、これは疾く遅き事こそあれ、必ずむなしからずとぞ承りをきたる。　（巻一　三一九頁）

ここで、「実夢」の条件としてあげられているのは、「空晴れ月明らかなる折」に見る「あざやかなる夢」であるという点である。この条件が、次の二つの〈夢〉を念頭に置いたものであることは明らかだろう。

①八月十五夜の月、昔より言ひならはしたる事なれども、ことはりにもすぎて隈なければ、……乙姫君の御夢に、うるはしきさましたる人の、髪上げて、にほひ異なる琵琶を下げて、「今宵の箏の琴の音、雲の上まであはれに聞こえゆるを、尋ね参りたるなり。雲居にも、我が伝ふ

べき例もなきに、天の下には、君ひとりぞものし給ひける。これもさるべき契りなり」とて、教へ給ふを、嬉しと思ひて、教へのままに伝へ給ひたるに、「この世に伝わらぬ、いま五つ残したるを、明年の今宵、下りまうできて、教へ奉らん」とて、うせ給ひぬと見て、うちおどろき給ひたるに、暁になりにけり。　（巻一　三二〇頁）

②つとめてより雨降りて、なごりの雲晴れやらねば、月いかならんと思ふに、夕より晴れて、月隈なくさし出でたれば、……さながらうちふし給ひたる夢に、同じ人おはして、「教へ奉りしよりも、優れてあはれなる琵琶の音かな。この御手ども、聞き知る人、えしもなからんものを」とて、今五つ教へ給ひて、「あはれ、あたら人の物を思ひ乱れ給ふべき宿世のおはするかな」とて、帰り給ひぬと見て、覚め給ひぬ。　（巻一　三二一頁）

物語の始発に置かれた、乙姫君の見た天人の〈夢〉は、二つながらに八月十五夜、「月隈なくさし出でた」る夜に設定されている。中村本は、原作にも存するこの二つの〈夢〉を意識しながら、冒頭部の「実夢」を語ったとみて間違いないであろう。

河添房江氏は、この二つの〈夢〉を検討し、「(1)（＝①二重傍線部）の吉夢が(3)（＝②二重傍線部）の凶示に比して遙かに重く中君の生をつかさどる」ものであり、中村本とは、「いってみれば原作より『宇津保』の音楽霊験譚的構造によほど接近している」作品であると述べられている。たしかに、河添氏が指摘するように、物語末尾、「入内間近い姫君の栄えを予祝する中君の琵琶の弾奏が他ならぬ運命の八月十五夜に構えられることで、天人の夢を端緒とする音楽繁栄譚はその円環を見事なまでに閉じいたった」のは事実であろう。しかし、そのことと、①の〈夢〉に「中君の繁栄譚をあくまで貫いていく」ほどの予言性があるかどうかは別である。もし、ほんとうに『夜寝覚物語』が音楽繁栄譚としてあるとするならば、なぜ、物語末尾の「夢はむなしからぬ事と、ありがたくぞ侍りしとぞ」（巻五　五五七頁）という言は、乙姫君の琵琶の弾奏が行われた八月十五夜の場面を直接受けるものではないのだろうか。末尾の言の直前には、音楽に関わる描写は一切ないのである。京極の屋敷における琴の一族の弾奏の場面によって見事に幕を閉じる『宇津保物語』とは、やはり、その主題の位相を異にしていると言わざるをえない。

今、①の〈夢〉を素直に読み直すならば、「雲居にも、我が伝ふべき例もなきに、天の下には、君ひとりぞものし給ひける。これもさるべき契りなり」というくだりは、乙姫君の〈夢〉に天人が現れたその理由を述べているとしか読むことはできない。そこに、末尾まで「中君の生をつかさどる」ほどの予言性を見て取ることはできないのである。①の〈夢〉に予言性があるとするならば、それは、「明年の今宵、下りまうできて、教へ奉らん」というくだりに集約されているとしか考え

られないのではないか。だとすれば、それは、他ならぬ②の場面において、早々に実現するものであったということになる。①の〈夢〉の予言性とは、②の〈夢〉で成就することによって、既に完結しているものであったのである。原作に存したより重い予言性、「これ弾きとどめたまひて、国王まで伝へたてまつりたまふばかり」（巻一　一七頁）というくだりが、中村本において、おそらく意図的に排除されていることの意味を軽んじてはなるまい。つまり、①の〈夢〉は、物語全体を貫くほどの力を有していないのであり、未来を予言するという点においては、やはり、②の〈夢〉において語られる、「あはれ、あたら人の物を思ひ乱れ給ふべき宿世のおはするかな」という天人のことばこそが、大きな意味を持ってくると考えられるのである。

三　天人の予言とその実現（2）

二年目の天人の〈夢〉に示された乙姫君の「思ひ乱れ給ふべき宿世」、それが、男君との人違えによる逢瀬に端を発する一連の出来事を指すものであることは疑いない。それは、物語内の次のくだりからも確認されよう。

八月になりて、十五夜の月いと（くカ）まなきに、（乙姫君は）昔思ひ出で給ひて、「いみじく心乱るべきものぞ」と月の都の人ののたまひしは、げにと思し合はせられて、……

（巻二　三八四頁）

折しも八月十五夜、思い出されるのはあの天人の〈夢〉である。ここに示される「いみじく心乱るべきものぞ」が、天人の「あたら人の物を思ひ乱れ給ふべき宿世のおはするかな」という言を指していることは動かない。このとき、乙姫君は、男君との間にできた石山姫君出産後、姉君との確執に悩み、父入道のいる広沢に身を寄せていた。いわば、既に、充分に「物を思ひ乱れ」た後のことであり、だからこそ、ここで、その予言を「げに」と了解することになるのである。それは、つまり、天人の第二の予言は、男君との逢瀬をめぐる一連の事件という形で既に発露し、実現していたということではないか。続く場面において、乙姫君から天人の〈夢〉のいきさつを聞いた宰相中将は、次のような感慨を抱く。

心の中には、「さやうの天の楽、まさに僻事あらんや。物思ふべき宿世のおはすと教へ給ひけんさへ違はず、又の年と契り給ひけんもたしかなり。これを思ふに、この御物思ひも、始終あるべくは、何かは、『伝ふべき人もなし。君ばかりこそと思ふ』とて、二年までおはして、残す手なく伝へ給ふべき」と思し続く。（巻二　三八六頁）

従来、このくだり、特に傍線を付した後半部は、「音楽奇瑞譚が、苛酷な宿世の予言に優先する」[7]ことを証明する場面として捉えられてきた。しかし、ここで重視せねばならないのは、むしろ、天人の予言の内容そのものに触れている前半部

であろう。ここで述べられているのは、天人の予言の確実性の再認である。「又の年と契り給ひけんもたしかなり」とは一年目の〈夢〉の成就を、「物思ふべき宿世のおはすと教へ給ひけんさへ違はず」とは二年目の〈夢〉の成就を表すものであることは明白であろう。つまり、ここにおいて、物語始発に置かれた天人の〈夢〉は、一年目のそれのみならず、二年目の「思ひ乱れ給ふべき宿世」の予言までもが、既に実現していることが表明されているのである。天人の〈夢〉は、ここで、物語を主導するその力を手放したとも言えるだろう。続く後半部、「この御物思ひも、始終あるべくは」という宰相中将の思いは、天人の予言の成就を見た今、その予言から離れた地平での、乙姫君の幸福を期待する気持ちであるに他ならない。

事実、男君との逢瀬こそが〈夢〉の予言が実現した形であることを裏付けるかのように、中村本は、そこに、様々な〈夢〉の比喩を散りばめているのである。その例をいくつかあげておこう。

A今日初めて源氏の大臣に、御文聞こえ給ふべき日に定められて、そゝのかされ給へば、はづかしきあたりはと、いたく用意せられ給ふにも、こゝら見わたし給ふ中に、ほどなき夢、まづおぼしいでられて、涙ぐまれつゝ、

あふことのたゞうたゝねの夢ならば思ひなぐさむかたもあらまし　（巻一　三二九頁）

Bその夜（＝大君との婚礼の夜）になりぬれば、中納言渡りて見給へば、心ざしおろかなるべき程にはなけれども、ありし夢には並ぶべくもなければ、なをしづめがたくおぼす。　（巻一　三三二頁）

C対の君、少将など、うちもまどろまず心をくだき、ながめくらす折、この中納言殿の、大君の方にて、宵の間など、もののたまふ声・けはひの、ありし夜の夢にたがはねば、あさましくて、いかなる事ぞとあやしく、……

（巻一　三三三頁）

D「このわたりには、すべていみじくつゝましく侍り。夢見給ひし所に、しのびて立ち寄り給へ」ときこえて、九条に渡りぬ。　（巻一　三四六頁）

E七月十六日、月いとおもしろきに、格子の下に寄りて、ありし夢は今宵ぞかしと思し続くるに、うらめづらしき風の音も悲しきに、格子をいとしのびてうち叩きて、

人しれずなにとしほるゝ袖ならんつゆの情けもかけぬものゆへ　（巻一　三六七頁）

A～Eにあげたのは、人違えによる逢瀬の後、その逢瀬そのものが「夢」として回想されるくだりである。思いがけない逢瀬を「夢」と比喩することは、物語の表現史に照らし合わせても、特別なことではない。しかし、中村本における〈夢〉の比喩は、単に、この逢瀬を、現実感のないはかないものとして位置付けるためだけにあるのではない。今、ここで確認

しておきたいのは、〈夢〉の比喩が執拗に繰り返されていること、就中、Aの和歌・B・Eにおいては、対応する原作の本文には「夢」なる語を見出すことができないということである。中村本は、ことさらに、この逢瀬に〈夢〉というイメージを付着させようとしているかのようである。それは、この逢瀬が、天人の〈夢〉の予言の範疇にあることを端的に示すためではなかろうか。男君との逢瀬は、決して偶然のものではなく、〈夢〉によって定められ、〈夢〉によって実現したものであった、という、いわば、中村本自身の持つ主題の発露をそこに見て取ることもできよう。

実は、先に見た、乙姫君による〈夢〉の予言の了解・宰相中将による〈夢〉の実現の確認が描かれた直後、乙姫君と左大将との縁組みが決定する。物語は新たな局面を迎え、乙姫君は男君から離れることになるのである。その直前に、天人の予言がすべて成就したことが語られる意味は大きいだろう。つまり、天人の二年目の〈夢〉の予言とは、乙姫君と男君の逢瀬に纏わる「乱れ」のみを指したものだったのであり、乙姫君が左大将と結婚し、男君の手から放れることにより、その機能を終えたと見るべきものだったのである。たしかに、この後も、左大将との意に染まない結婚による乙姫君の苦悩は描き続けられる。しかし、これほどまでに〈夢〉に対して饒舌であった物語は、左大将と乙姫君の結婚生活に対しては、〈夢〉なる語をほとんど使わなくなるのである。それは、この結婚が、物語の主たる筋からは外れること、〈夢〉とは無関係なものであることの証左ともなろう。

冒頭部の「実夢」が直接指していた物語始発の天人の二つの〈夢〉は、一年目の〈夢〉は二年目の〈夢〉で、二年目の〈夢〉は乙姫君と男君とのあやにくな逢瀬によって、それぞれ確かに実現することとなった。それは、「疾く遅き事こそあれ、必ずむなしからず」という「実夢」の性格を、見事に具現化するものとしてあったと言えよう。

しかし、物語はここで終わるわけではない。天人の〈夢〉によって主導された物語のひとつの枠組みがここで完結するとすれば、末尾の「夢はむなしからぬ事と、ありがたくぞ侍りしとぞ」という言は、いったい、何に対して述べられている言であるのか、ということが問題となってこよう。それは、天人の〈夢〉とどのように繋がるものなのであろうか。あるいは、隔絶したものとして位置付けられなければならないのだろうか。以下、物語の後半を辿りつつ、検討していくこととしたい。

四　「蓬莱の山の玉の枝」の〈夢〉(1)

乙姫君と左大将との縁組が決定した後、男君は、募る思いに堪えかね、乙姫君の元に忍び入ることとなる。この場面に、新たな〈夢〉が置かれていることを見逃してはならないだろ

う。

暮れゆくよりまた暁の事、かねて悲しくて、まどろまれたまぬに、暁方に、ちとまどろみ給ふ御夢に、いとうるはしく鬢頬結ひたる童の、黄金の色紙に包める物を取り出して、「これは御もとなる玉のたぐひなり」とて奉りたるを、ひき開けて見給へば、史記の一の巻の、玉の軸したるなりけり。めでたき文のさまかなと見給ふに、この女君、「これこそ蓬莱の山の玉の枝よ。一枝は御もとにあり。これはまろがにせん」とて取り給ふを、我がもとなるに並べてこそ持ためと思ひて、取らんとすれば、「しばしなをこれは置きて見ん。つゐには奉らん」とて、懐にひき入れ給ふと見給ふ程に、少将参りて、「御迎へに人参りたり。夜はや明けぬる」よし申すに、うちおどろきて思ふに、まことにうたがひなき夢のさまなれば、「いとひ給ふまじき夢をこそ見つれ」とて、起き出づべき方も覚え給はねば、……

（巻二　四〇六頁）

男君の見た〈夢〉である。天人の〈夢〉が実現し、物語を主導する力を失うやいなや、物語は新たな〈夢〉を提示することとなる。この〈夢〉が、後の物語の展開を左右する、重要な機能を有したものであろうことは、容易に想像されよう。

今、結論を急ぐ前に、この〈夢〉がいかなる〈夢〉であるのか、その解釈をしておかなければなるまい。端的に言えば、この〈夢〉は、懐妊を表す〈夢〉である。〈夢〉の末尾の「懐にひき入れ給ふ」は、懐妊の夢に特徴的な女君の動作であり、[8] 事実、この逢瀬によって乙姫君は懐妊、後に真砂君を出産することとなる。しかし、一読してわかるように、この〈夢〉には、「懐にひき入れ給ふ」という単純な懐妊の暗示以外にも、実に様々な要素が散りばめられており、その細部を読み取ることこそが重要だと思われる。実は、この〈夢〉の解釈はそう難しいものではない。なぜならば、物語には、この〈夢〉に対する「夢解き」が明示されているからである。

せめて慰めがたき御心に、夢解き召して、玉の枝の夢を語らせ給へば、「天の下並びなく賢く、優れたる男子ぞいできおはしまさん。たゞし、それをよそにやき、給はんずらん。さりとも、つゐには御手に得奉らせ給ひてん」と申すに、我が御心にも思し合わせられし御夢なれば、……

（巻二　四一二頁）

この「夢解き」を参考にしながら、男君の見た〈夢〉の内容を解釈していくこととしよう。まず、この〈夢〉には、「いとうるはしく鬢頬結ひたる童」が登場し、「史記の一の巻の、玉の軸したる」ものを渡す。この「史記の一の巻の、玉の軸したる」については、既に指摘があるように、「生まれてくる子は男子で、その子は将来、帝王を盛り立てる軸（国家の重責を担う者）になる」[9] と解せばよいものだろう。これは、夢解きの「天の下並びなく賢く、優れたる男子ぞいできおはしまさ

ん」という箇所に該当するところである。その後、乙姫君が「これこそ蓬莱の山の玉の枝よ。一枝は御もとにあり」と述べるのだが、男君の「御もとに」あるという「一枝」は、現在男君側に引き取られている石山姫君を、そして、乙姫君が自分の元に「置きて見ん」と述べる「一枝」は、今まさにその生命を宿した子・後の真砂君を指すこと、疑いない。それを、乙姫君が「つゐには奉らん」と述べることによって、夢解きに言う「さりとも、つゐには御手に得奉らせ給ひてん」という未来が予言されるのである。ここに、この男君の見た〈夢〉もまた、冒頭部に言う「実夢」＝未来を予言する〈夢〉として明確に位置付けられることになるだろう。この〈夢〉は、単に乙姫君の懐妊を暗示するためだけにあるのではない。物語始発の天人の〈夢〉に続く、第三の「実夢」として捉えなければならないものであったのである。

事実、この後、物語は執拗にこの〈夢〉が信ずるに足るものであることを強調する。〈夢〉を見た直後から、男君は、この〈夢〉を「うたがひなき夢」として認識していたが、その後も、この〈夢〉の信憑性の高さは、繰り返し語られていくことになるのである。

・少将、「なをいといかゞとのみ、頼みなく見え給ふ御さまなれば、時の間もうしろめたき」とて、急ぎ帰るに、御文奉り給ふ。

うつゝにていとゞつらきぞかくばかりいつはりならぬ夢もある世に

「それにさへ、他におぼしなすな」とて、ねたう恨めしかりしこの人も、今ぞつらかりし世も忘れて、よろづにかたらひつゝ、「この御返し、必ず」とのたまふ。……（乙姫君は）つねよりも見捨てがたきを、我ながらうとましけれど、

憂かりける契りのほどを知らましや思ひあはする夢なかりせば　（巻二　四三二頁）

・大納言殿は、人知れず御心の中に、げにまがふべくもなき夢のしるしを数へあて給ふに、はじめにはかはりて、めづらしうさへあなるを、思ふさまに見ましものをと、いみじう胸いたう思しけれど、たゞいま見ん事は思したえ給ふ。これほどに違はざりける夢なれば、つひにはと見えしばかりぞ頼もしけれど、しばしもよそのものに聞かん事の口惜しさを、いまさらに思し嘆く。

（巻二　四四〇頁）

繰り返される「いつはりならぬ夢」・「思ひあはする夢」・「まがふべくもなき夢」・「違はざりける夢」という〈夢〉の絶対性は、この〈夢〉が「実夢」であることを証明するものであろう。さらに言うならば、男君は、乙姫君と左大将との結婚を嘆きつつも、「これほどに違はざりける夢なれば、つひにはと見えしばかりぞ頼もしけれ」と、いつかは女君と添うことができるだろうと期待を失わないのであり、乙姫君の身が

既に他の男性と結婚することの決まった身であるならなおさら、この〈夢〉は、二人が最終的には添い遂げることになるという遠い未来までをも含んだ予言として機能することになるのである。つまり、この〈夢〉には、天人の〈夢〉には見られなかった、乙姫君と男君の幸福な結末が暗示されていると見なければならないだろう。

上、少しいざり出で給ひて、
うれしとも思ひしらでややみなまし憂きにたへたる命なりせば
言ふともなくまぎらはし給ふに、殿、
思ひしる折もありけり命こそ憂きにたへても嬉しかりけれ
かくて、殿、上、栄え楽しみ給ふさま、昔も例少なくぞありける。かやうに、夢はむなしからぬ事と、ありがたくぞ侍りしとぞ。（巻五　五五七頁）

物語末尾、ここに描かれているのは、紛れもなく、乙姫君と男君の満ち足りた姿である。そして、それを「かやうに」と受ける形で、「夢はむなしからぬ事と、ありがたくぞ侍りしとぞ」という結びが述べられていることを見逃してはならない。つまり、冒頭部と呼応すると言われる末尾、「むなしからぬ事」とされる「夢」が直接的に繋がっていくのは、物語始発に置かれた天人の〈夢〉ではなく、男君の見た「玉の枝」の〈夢〉だったのである。物語末尾の大団円とは、男君の見た〈夢〉の予言の成就した形としてあったのであった。

五　「蓬莱の山の玉の枝」の〈夢〉（2）

前節において検討してきたように、物語末尾の「夢はむなしからぬ事と、ありがたくぞ侍りしとぞ」という評言は、男君の見た〈夢〉と結び付くものとしてあった。このように理解することによって、中村本『夜寝覚物語』の、従来とは異なる新たな構造が浮かび上がってくると思われるのだが、しかし、最後に、ひとつだけ考えておかなければならないことがある。それは、物語前半に描かれた天人の〈夢〉と、後半の男君の見た〈夢〉とは、どのように関わるものなのか、という点である。両者は、まったく隔絶したものとして切り離して考えるべきものなのであろうか。それとも、なんらかの関連性を以て描かれているものなのだろうか。そのことを考えるために、もう一度、男君の見た〈夢〉を引いておきたい。

いとうるはしく鬢頬結ひたる童の、黄金の色紙に包める物を取り出して、「これは御もとなる玉のたぐひなり」とて奉りたるを、ひき開けて見給へば、史記の一の巻の、玉の軸したるなりけり。めでたき文のさまかなと見給ふに、この女君、「これこそ蓬莱の山の玉の枝よ。一枝は御もとにあり。これはまろがにせん」とて取り給ふを、……（巻二　四〇六頁）

この〈夢〉の解釈は、前節で試みた通り、そう難しいものではない。ただし、ひとつだけ問題となるのは、「蓬莱の山の玉の枝」である。男君が「鬢頬結ひたる童」から授かったのは、「史記の一の巻の、玉の軸したる」ものであった。それを、なぜ、わざわざ「蓬莱の山の玉の枝」に置き換えなければならなかったのであろうか。先に見た「夢解き」の場面において、この〈夢〉は、「玉の枝の夢」と表現されている。いわば、この〈夢〉の核として、「蓬莱の山の玉の枝」があるとするならば、その機能を正確に把握しておく必要があるだろう。

「蓬莱の山の玉の枝」というモノが想起させるのは、なにより、『竹取物語』の世界である。

くらもちの皇子には、東の海に蓬莱といふ山あるなり。それに、銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ。（五七頁）

求婚者であるくらもちの皇子に難題としてかぐや姫が課したのが、「蓬莱の山の玉の枝」を持ち帰れというものであった。周知の通り、くらもちの皇子はこの難題に答えられず、求婚者の資格を剥奪されるわけであり、そのような『竹取物語』の展開を念頭に置くならば、あるいは、現在男君が女君の結婚相手としての資格を持たないことの比喩である、とか、あるいは、それほど貴重なモノに例えられる生まれ来る子の稀有な資質を表すためのものである、とか、いくつかの解釈は成り立ちそうなところである。とまれ、「蓬莱の山の玉の枝」という存在によって、物語が、『竹取物語』の世界を強烈に喚起するということだけは確実であろう。

『竹取物語』が、月の都や八月十五夜というキーワードによって支えられた物語であることは疑いない。そして、そのイメージが、物語冒頭の天人の〈夢〉と繋がるものであることもまた明らかではないか。たとえば、物語には、次のようなくだりを見出すことができる。

①又の年の八月十五夜の月、おもしろければ、琵琶を弾きつゝ、格子も上げながら、更くる程に寝入り給ひたれども、ありし人、夢にも見え給はず。うちおどろき給へば、月も入り方になりぬ。口惜しくて、

天の原雲の通ひ路閉ぢてけり月の都の人もとひ来ず

（巻一　三二二頁）

②八月になりて、十五夜の月いと（くカ）まなきに、昔思ひ出で給ひて、「いみじく心乱るべきものぞ」と月の都の人ののたまひしは、げにと思し合はせられて、……

（巻二　三八四頁）

①は、天人の第二の〈夢〉が語られた翌年の八月十五夜の場面、②は、第三節で検討した乙姫君の述懐の場面であるが、ここで、物語始発の〈夢〉においては、「うるはしきさましたる人の、髪上げて」（巻一　三二一頁）としか形容されていなかった天人が、「月の都の人」と言い直されていることには

留意しなければならないだろう。さらに、①の場面の直後には、父大臣が乙姫君の姿を「なよ竹のかぐや姫」（巻一　三二二頁）に準えるくだりが続き、物語が、天人の〈夢〉に、意識的に『竹取物語』のイメージを付着させんとしている様が見て取れる。始発の天人の〈夢〉には、『竹取物語』の世界が色濃く投影されていると言えよう。

だとすれば、「蓬莱の山の玉の枝」もまた、『竹取物語』を念頭に置いた上で、意図的に描かれたものであったと見て間違いなかろう。『竹取物語』を想起させるモノとしての「蓬莱の山の玉の枝」が置かれることによって、男君の〈夢〉は、始発の天人の〈夢〉と繋がっていく。つまり、「蓬莱の山の玉の枝」とは、二つの〈夢〉を『竹取物語』の世界を媒介として緊密に結び付けるもの、両者が決して無関係なものではないことを表明するために置かれたものであったのである。男君の〈夢〉に現れた童の「鬢頬結ひたる」という姿と、始発の〈夢〉に現れた天人の「髪上げて」という姿との共通性から、両者を同一人物と見る論[10]なども踏まえるとするならば、男君の〈夢〉とは、始発の天人の〈夢〉の続編・第三の天人の〈夢〉と見なすべきものであるということになろうか。いずれにせよ、男君の〈夢〉は、天人の〈夢〉と隔絶したものとしてあるのではない。第一・第二の〈夢〉が成就した後、それを引き継ぐ形で新たなる未来を予言する第三の〈夢〉として、天人の〈夢〉の世界を取り込み、発展させたものとして位置付けられなければならないのである。

つまり、中村本『夜寝覚物語』とは、冒頭から末尾までを貫く絶対唯一の〈夢〉によって物語が展開するという形の物語ではなく、いくつかの〈夢〉の成就を描きながら、ひとつの〈夢〉が次の〈夢〉を導き、〈夢〉から〈夢〉へとその予言性が引き継がれる形で展開している物語なのである。そして、これらの〈夢〉を並べてみれば、たしかに、冒頭の「空晴れ月明らかなる折、あざやかなる夢を見るを、実夢と申して、これは疾く遅き事こそあれ、必ずむなしからずとぞ承りをきたる」という言と、末尾の「夢はむなしからぬ事と、ありがたくぞ侍りしとぞ」という言とは、その直線上の首尾に位置付けられるものであったことに気付かされるのである。

この物語にあって、〈夢〉とは、たしかに、物語の大きな枠組みとして、全体を貫くものであった。しかし、それは、〈神話的構造〉と呼べるような単純なものではなく、むしろ、複雑な起伏を描きつつ、この物語独自の位相を浮かび上がらせるものであったのである。

おわりに

以上、中村本『夜寝覚物語』に描かれた様々な〈夢〉を辿り見ることにより、それらがどのような機能を果たしているのか、また、物語の主題とどのように関わってくるのかを見

定めつつ、従来あまりにも単純な枠組みに当てはめられてきたこの物語の新たな構造を提示してきた。

主人公に関わる予言というと、冒頭で示され末尾で成就するというのが当然であると考える向きが、物語研究には確かに存在しているように思われる。しかし、それは、あるいは、近代的・合理的な考えに過ぎるかもしれない。物語における予言や〈夢〉とはもっと混沌としたものであり、そのわかりにくさの中にこそ、その物語固有の論理があるのではないだろうか。

注

(1) 河添房江「中村本寝覚物語」(『体系物語文学史三』有精堂 S58)
以下、河添氏の論考の引用は、すべてこの論考に拠るものである。

(2) 永井和子「寝覚物語と改作本寝覚物語」(『続 寝覚物語の研究』笠間書院 H2)

(3) 前掲 (2) 論文

(4) たとえば、次の例は、「越路」との掛詞としてではあるが、「跡絶え」た男女の仲の〈過去〉を「こしぢ」と表現しているものである。

・『後撰和歌集』巻八・冬・四七〇 (新編国歌大観)
式部卿あつみのみこしのびてかよふ所侍りけるを、のちのちたえだえになり侍りければ、いもうとの前斎宮のみこのもとよりこのごろはいかにぞとありければ、その返事にをんな、
しら山に雪ふりぬればあとたえて今はこしぢに人もかよはず

(5) あるいは、ここに、中村本の成立自体に『無名草子』が深く関わっているという説を想起してもよいかもしれない。
鈴木弘道「中村本成立当時に於ける原作の形態」(『平安末期物語の研究』初音書房 S35)

(6) 底本「こひ」。永井和子氏はこれを「恋」と解されているが(前掲 (2) 論文)、その後の「実夢」との対比から「寤寐」とする説(高橋亨・河添房江他「座談会・なぜ物語文学を研究するか」(『解釈と鑑賞』S55・9) 頭注) に従っておく。

(7) 石埜敬子「改作本『夜の寝覚』を中心に」(大槻修・神野藤昭夫編『中世王朝物語を学ぶ人のために』世界思想社 H9)

(8)「懐に入れ給ふ」が懐妊の暗示であることに関しては、『源氏物語』若菜巻における柏木の見た猫の〈夢〉を考察対象とした別稿を用意している。

(9) 坂本俊子「『夜の寝覚』中間欠巻部の夢とその役割―「史記の一の巻」と玉の軸―」(『王朝細流抄』5 H12・12)

(10) 前掲 (9) 論文

※中村本『夜寝覚物語』の引用は、『鎌倉時代物語集成 第六巻』(笠間書院) に拠った。ただし、読解の便宜のため、私に表記を改めてある。他作品の引用については、以下の通り。
・『夜の寝覚』(原作本) ……新編日本古典文学全集 (小学館)
・『無名草子』……新編日本古典文学全集 (小学館)
・『竹取物語』……日本古典文学全集 (小学館)

(ふじい・ゆきこ　本学研究員 (COE))